



見上げれば、天の川

常浪川（阿賀・上川）

1時間ちょっと。常浪川にはいつも最高の星空が待っていてくれる。梅雨が明けたら、透明度の高い夜空でもう一度撮影したいと思った。



大地を潤し、生命を育む川。川に沿って人が集まり、村ができ、

町ができた。流域には長く続いてきた暮らしがある。川を訪ね、そこで生きる人たちと、水辺の風景

本日のご案内

渡部 佳則

(写真家)

特に魅力的だったのは星空。川の上流へ行けば行くほど市街地の明かりが届かなくなり、まぶしいくらいの星の輝きに出合えるのだ。

7月初旬、梅雨の晴れ間を狙って夜中に常浪川を目指した。最も上流の室谷集落から川沿いの旧道に下りる。残念ながら、夜空はず

つきりしない薄曇り。だが真っ暗なこの夜空は薄雲を突き通して星の光が届き、なんと天の川まで見えてしまう。岩で覆われた川底の上を水がゴゴゴと音を立てて流れてゆき、見上げれば天の川を挟んで右に木星、左に土星が目に見え、輝いていた。

新潟市内から高速道路を使えば

阿賀野川の支流、常浪川。旧上川村（阿賀町）の集落の多くが、この川に沿って点在する。

私が初めて訪れたのは30年以上前のこと。サイクリングで林道を福島県境まで上った。それ以来、常浪川と上流に広がる雄大な原生林の風景に魅かれ、サイクリングや写真撮影で何度も訪れた。

室谷地区の常浪川と星空。今年の夏は天の川とともに木星と土星が見えていて、とてもにぎやかだ



清野初男さん。体力があるときにたくさん蓄えたまきの前で。まだまだ何年分もある

山の恵み頂く住人

常浪川を訪ねるにあたり、ぜひ会いたい人がいた。9年前、取材に来た際に偶然お会いし、まき割りをしているところを撮らせてもらった。室谷集落の清野初男さんだ。そのときの言葉がとても印象深かった。

「冬を越すにはまきが大事。この人間は自分の体が動かなくなってきたときの分も見込んで、元気なうちに5年分も10年分もまきをためておくんだ。」

その清野さんを撮ってから9年、今どうしているのか。恐る恐る家を訪ねると、うれしいうちにすっかりした足取りで、元気そうな清野さんが現れた。

今や集落の最年長、93歳になつていた。もうまき割りにはしていないという。でも言葉通り、元気な時にしっかり蓄えていたまきを近所に積んであり、私を案内してくれた。

豪雪地での冬の暮らしは厳しい。しかし、それを乗り越える知恵と、地道に備えていく暮らし方が、とても輝いて見えた。

常浪川の周りは山だらけ、住人は多くの山の恵みを頂く。私が訪ねた際には斜面に登ってイワシゲという草を刈っている人がいた。笹団子を縛るひもとして使うそうだ。

作業小屋ではフキの皮をむいているご夫婦。これは地域にある工場で缶詰にする。ほかにもさまざまな山菜やキノコ、薬草になる樹皮など、冬季以外はいろんなものが採れる。この人たちは農作業以外でも毎日何かと忙しいのだ。



約9千年前の縄文時代草創期からの土器、石器、人骨が発掘された室谷洞窟



まき割りをしてきたろの清野さん(2010年撮影)



常浪川の流れは変化に富んでいる。深くて狭い谷間を流れたり、広い河原を作ったり、まるで池のように水が滞っている場所もある

本格的な林業も健在だ。

室谷から10きほど下流の上川林業では毎日、常浪川近くの山で木を切り出して製材している。近隣では製材業はどんどんなくなり、ここだけになってしまったそう。

常浪川流域は小瀬ヶ沢洞窟、室谷洞窟で縄文時代草創期からの土器、石器、人骨などが発見されたことも有名だ。1万年前から人が住んできたことになる。

「この人たちは昔から自分の仕事と、人の仕事を区別

分かち合った暮らし

「しないんだ」

清野初男さんが言う。

「種刈りでもなんでもそう。その日自分の作業が終わると、まだ終わっていない人のところへ行って作業を続ける。自分の作業が終わらないときは、終わった者が助けに来てくれる。そういう土地なんだ。今はほとんどなくなってしまったけどね」

もしかするとこの土地の人たちは縄文時代の、皆で分かち合うという暮らし方を、ずっと引き継いできたのかもしれない。



上川林業で製材を長年担当してきた長谷川美紀男さん(65)。製材用のマシンを自在に操り、大きな丸太から手際よく角材や板を切り出していく職人技に、見とれてしまった

笹団子を縛るひもとなる、「ワシゲ」と呼ばれる草を持つ石田守家さん(76)と安子さん(70)夫婦。「最近では山に入る人が、めっきり少なくなりました」と漏らす

作業場でフキの皮をむいている、清野勝義さん(71)と正子さん(67)夫婦。作業しながら、「以前は抱えもあつた、大マイタケが採れたこともあつた、この土地の豊かさを語ってくれた。フキが終わると次はタケノコをまた



常浪川の上流の山々は、ブナの広大な原生林に覆われ、春の新緑、秋の紅葉、冬の雪景色、どれも本県の財産と言っていきたいほどの美しさです。その大自然に抱かれて暮らしている人たちも、すごく輝いて見えました。



〈わたべ・よしのり〉 1959年見附市生まれ。中学校教師から、写真家・上山益男氏に師事したのち、91年よりフリー写真家として活動。星空と仕事をしている人の撮影が大好き。